

<研究ノート>

IFLA LRM 試論 (6) -LRM5.7 「集合体のモデル化」

千葉孝一

第7章 LRM5.7 「集合体のモデル化」

はじめに

LRM5.7を論じるに当たり、まず訳語を整理する。LRM5.7の原題は「Modelling of Aggregates」であり、邦訳は「集合体現形のモデル化」となっている。しかし、「aggregate」と「集合体現形」(aggregate manifestation)はまったくの別物であり、邦訳では両者が混同されている。

「aggregate」は「集める」ことを意味する言葉だが、邦訳ではそれを「集合体現形」ではなく、「集合体」と訳している箇所がある。「aggregate」の具体例について述べた、以下の一節である。

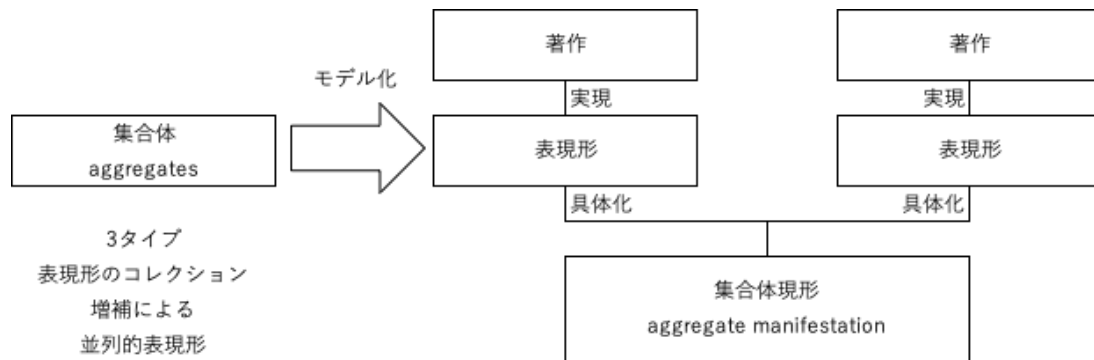
その例には、雑誌の各号（記事の集合体）、単一の巻にまとめられて出版された複数の小説、独立して執筆された章で構成される図書、CD上の編集物（個々の歌唱の集合体）、様々な形で収集・選択された著作集がある。¹ (引用1)

引用1における2箇所の「集合体」の原語は共に「aggregates」だが、それを「集合体現形」と訳すことは適切ではない。それらは上記の通り、「複数の小説」を集めたアンソロジーや音楽のコンピレーションCD等を指しているからである。

LRMはこの5.7と、次の5.8「逐次刊行物のモデル化」(Modelling of Serials)を、ペアで論じている。引用1にある通り、雑誌の各号は「記事の集合体」であり、両者のモデル構造には共通点が存在しているからである。

つまり、「集合体」(aggregate)は逐次刊行物と同様に、特定のタイプの図書館資料を指す言葉なのである。一方、「集合体現形」(aggregate manifestation)はそうした「集合体」をモデル化した際に登場する「体現形」の一種であり、両者は切り離して考えなければならない。

これまでの議論について、以下に図として提示する。これはあくまでも模式図であり、LRMが提示するモデル図とは異なる。また、この章では「実体」「個別資料」についてはすべて省略し、図示も言及も行わない。



この模式図を見れば、「集合体現形」はそもそもモデル化の対象ではないことが分かる。モデル化の対象はあくまでも図書館資料であり、「Modelling of Aggregates」はシンプルに「集合体のモデル化」と訳すべきである。

模式図のように、「集合体」（モデル化前）と「集合体現形」（モデル化後）を明確に分離することが、LRM5.7読解のスタート地点なのである。

また、先の引用1は「Aggregate Collections of Expressions」と題されており、邦訳は「表現形の集合コレクション」となっている。これは、LRM図5.7（模式図のモデル化後に相当する）を念頭においた訳と考えられる。

だが、引用1が例示しているのは模式図の左側（モデル化前）であり、LRMは「集合体」（図書館資料）を、3タイプ例示しているのである。「Aggregate Collections of Expressions」はそのうちのひとつであり、「表現形のコレクションとしての集合体」という意味である。例えば、月刊雑誌の2025年3月号は、そこに収録された記事の「表現形のコレクションとしての集合体」なのである。残りの2タイプについては、後に触れる。

また、「集合体」が「著作のコレクション」ではなく、「表現形のコレクション」である理由については、第3節で詳述する。

実は、LRM 5.7の原文では、「aggregate manifestation」という言葉は2箇所（図5.7の内部にあるものを含めても3箇所）しか登場しない。その為、LRM 5.7の邦訳における「集合体現形」はほぼすべて、「集合体」に置き換える必要がある。この混同による混乱は題名だけでなく、LRM 5.7の邦訳全体に及んでいるのである。

こうした「集合体」と「集合体現形」の混同は、「集合体」をもっぱらキャリア（容器）として認識していることから生じている。例えば、短編集は小説をいくつか「aggregate」したキャリアであり、それをそのままモデル化すれば「体現形」（「集合体現形」）になる。「集合体」＝「集合体現形」というわけである。

だが、「集合体」は単に「集合体現形」として「モデル化」されるわけではない。先の模式図で明らかかなように、LRMでは「集合体」もまた、小説やピアノ協奏曲と同様に、「著作」と「表現形」（コンテンツ）＋「体現形」（キャリア）という形でモデル化される。そしてLRMは、キャリアよりもコンテンツを重視するモデルなのである。

問題は、LRMが指摘する「集合体」のコンテンツが、通常のそれとは異なる点にある。アンソロジーのコンテンツとは何かと尋ねられれば、普通はそこに収録された作品群と答えるだろう。先の模式図もそれに準じている。

しかし、LRMはそうした答えを否定する。LRMによれば、先の模式図のようなモデル化は「集合体」を捉えそこなっているのである。LRMは、「集合体」は収録作品だけではなく、当の「集合体」独自のコンテンツを含む形でモデル化するべきだと主張するのである。

では、収録作品とは異なる「集合体」独自のコンテンツとは何か。それを確認することが、LRM5.7読解の眼目となる。

第1節 複数 (multiple) の系列

先に指摘した通り、LRMは「集合体」について、3つのタイプに分類している。冒頭で引用した「表現形のコレクションとしての集合体」と、「増補による集合体」(Aggregates Resulting from Augmentation) および「並列的表現形の集合体」(Aggregates of Parallel Expressions) である。

これらの「集合体」は、邦訳ではすべて「集合体現形」になっている。しかし、アンソロジーやコンピレーションCDと同様に、それらもまた図書館資料に他ならない。LRMは「増補による集合体」の例として、オリジナル作品に「序文、序論、挿絵、注釈などが増補」されたケース、「並列的表現形の集合体」の例として、「多言語環境で出版されるマニュアルや公的文書」等を挙げている。²

このような「集合体」はいずれも図書館資料として特に珍しいものではない。しかし、ありふれていることはモデル化が容易であることを意味しない。

ここでは例として、同じ中編小説「 α 」と、別の短編小説「 β 」と「 γ 」をそれぞれ組み合わせてコレクションした、ふたつのアンソロジー「X」と「Y」を考える。

まず、モデル化前の相互関係について、以下に図示する。

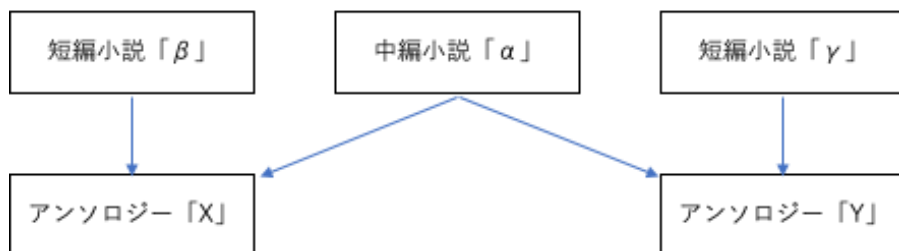
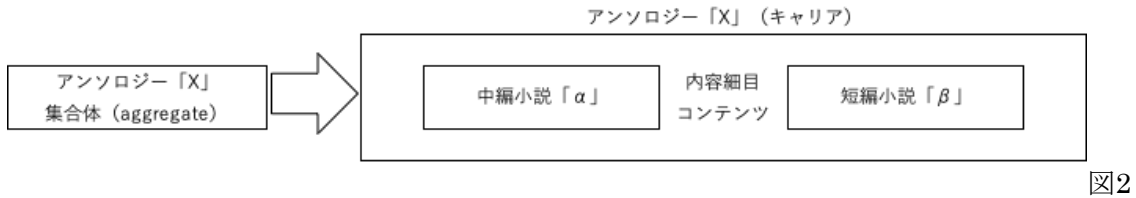


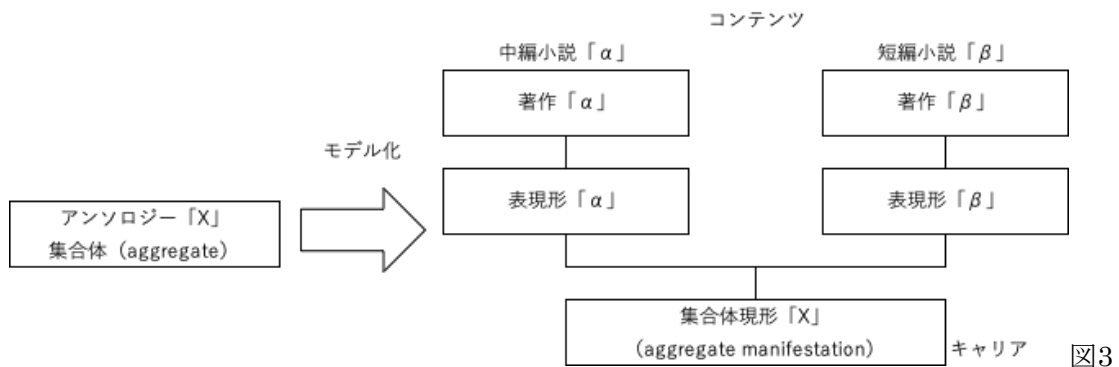
図1

FRBR以前の図書館目録ではキャリアが中心に据えられているので、中編小説「 α 」と短編小説「 β 」はキャリアとしてのアンソロジー「X」に内属するコンテンツとして扱われ、「内容細目」に記載される。その扱い方について、LRMと比較する為あえて図示すれば、

以下のようなになる (アンソロジー「Y」については同型なので省略する)。



一方、これらのアンソロジーについては、先の模式図と同じ形でモデル化することも可能である。その場合、アンソロジー「X」は、中編小説「α」と短編小説「β」の「著作」と「表現形」が前面に立ち、「集合理現形」がその配分先となる形でモデル化されることになる。以下に、図示する。ここでもアンソロジー「Y」の図示は省略する。また、LRMは、以下のようなモデル化を否定していることを、再度確認しておく。



この図2と図3の違いについて、LRMは次のように指摘している。引用にあたり、邦訳の「集合理現形」を「集合体」に変え、原語「aggregates」を補入した。

複数の**表現形**を具体化した**体現形**という集合体 (aggregates) のモデル化は、単純で明白である。即ち、**著作**と**表現形**を、それを具体化する出版や物理的な**体現形**の形式にとらわれずに、同等に取り扱うことができる。³ (引用2)

先の図2は、FRBR以前の図書館目録において、「著作」と「表現形」が「物理的な体現形の形式にとらわれ」ていることを視覚化したものである。

図3ではそれと対照的に、「著作」と「表現形」は各々独立し、「体現形の形式にとらわれずに、同等に取り扱」われている。この図3は引用2の指摘に合致しているわけで、そこに瑕疵があるとは思えない。

だが、LRMは図3のようなモデル化には見落としがあると指摘する。アンソロジーに収録

する小説をどれにするか、また、集めた小説をどのように配列するかは自動的に決まるわけではない。つまり、誰が何をどう組み合わせ、配列するのかが問題となる。

LRMはそうした「aggregate」のプロセス（図1の矢印部分）に注目し、次のように指摘している。引用にあたり、これまでと同様に「集合体現形」を「集合体（an aggregate）」に変えた。また、他にも一部の表現を変えると共に、原語（discrete）を補入した。

集合体（an aggregate）のモデル化を単に個別（discrete）の**表現形**の具体化として捉えようと、集合者（aggregator）や編者の創造的な行為を認識しそこなうことがある。**表現形**を集めるプロセスは、それ自体が知的・芸術的な行為であり、それゆえに**著作**を成立させる基準と合致する。（中略）**表現形**を組み合わせ、その結果、**集合体現形**（*aggregate manifestation*）を創造するプロセスにおいて、集合者は**集合化著作**（*aggregating work*）を創造する。⁴（引用3）

LRM5.7の半ば過ぎに登場するこの一節が、「集合体現形」(aggregate manifestation) のLRM5.7における初出となる（→補遺1）。

引用3を一般的に言い換えれば、作品をいくつかピックアップしてアンソロジーを編むことは「知的・芸術的な行為」であり、そのプロセスにおいて、収録作品とは異なる新たなコンテンツが創造される、となるだろう。以後、新たに創造された「集合体」の独自コンテンツについては「aggregate」の頭文字を使って、「Aコンテンツ」と表記する。

先の図3には、こうしたAコンテンツをモデル化した「集合化著作」と「集合化表現形」(aggregating expression) が抜け落ちており、対象を認識しそこなっているというのが、LRMの主張である。

LRMは「集合体」を次のように定義している。引用にあたり、邦訳の「集合体現形 (aggregate)」を「集合体 (aggregate)」に変え、原語「multiple」を補入した。

集合体 (aggregate) は、複数 (multiple) の**表現形**を具体化している1つの**体現形**と定義される。⁵

この定義は「集合体」がモデル化後、「実体」がどのような構成になるかを説明したものであり、「1つの体現形」は「集合体現形」のことである。しかし、この一節で注目すべきなのは「体現形」ではなく、「複数 (multiple) の表現形」の方である。それは、単に集められた作品の「表現形」が複数あることを意味するだけでなく、それらとはまったく別系列の「表現形」である、Aコンテンツをモデル化した「集合化表現形」が存在していることも意味しているのである。

図3に戻り、LRMの指摘に合わせて、「集合化著作」と「集合化表現形」を補ったものが、以下の図4である（アンソロジー「Y」の図示はこれまでと同様に省略する）。この図4のモ

デル化後、つまり矢印右側が、LRM図5.7「General Model for Aggregates」に対応している。邦訳はそれを「集合体現形の汎用モデル」と訳しているが、これまで指摘してきた通り、「集合体の汎用モデル」と訳すべきである。

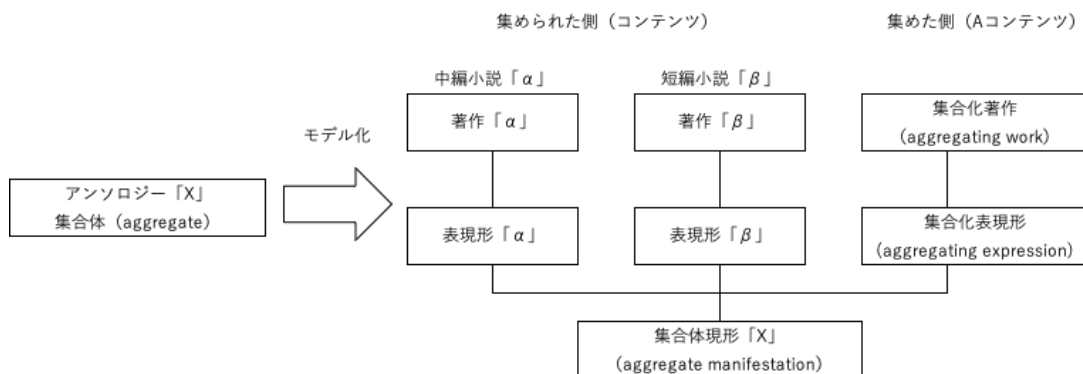


図4

LRM図5.7「集合体の汎用モデル」はその名の通り「汎用」なので、「実体」のnomenは記されていない。しかし、あらゆる「実体」は「少なくとも1つのnomenを通して名づけられる」⁶ので、図4の「集合化著作」と「集合化表現形」にも必ずnomenがある。この場合、それは当然「X」であり、それ以外は考えられない。

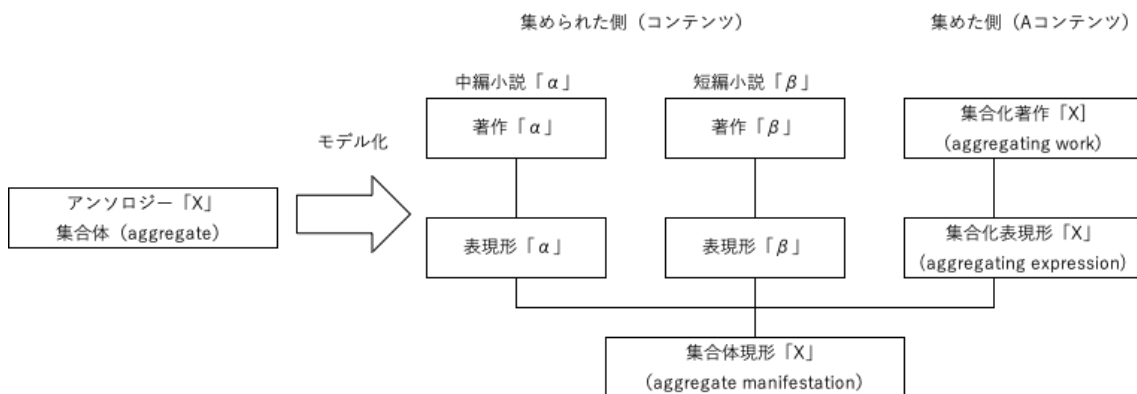


図5

一般に、特定の「集合体」をモデル化した「集合化著作」と「集合化表現形」そして「集合化体現形」の系列は、いずれもこの図5と同様に、元の「集合体」と同じnomen（正確にはnomen文字列）をもつことになるのである。

そして、この図5と図3を比較すると、図3のようなモデル化の欠陥が見えてくる。図3のように「集合化著作」と「集合化表現形」(Aコンテンツ)を欠く形でモデル化した場合、LRM6.1で指摘されている、典型的なユースケース（「ある著作の諸表現形の、すべての体

現形を発見する) 7)に障害が出てしまうのである。

コンテンツ優先のLRMにおいては、コンテンツからスタートしてキャリアを「発見」するというのが標準的なフローであり、ユーザーは先の図5あるいはLRM図5.7を、上(コンテンツ)から下(キャリア)へ、つまり「著作」→「表現形」→「体现形」というルートを辿ることになる。

「集合体」をモデル化する際、そうした標準的なフローを維持する為には、モデル化後も、元の「集合体」と同じnomen(文字列)をもつ「著作」が必要になる。

しかし、図3のようにモデル化した場合、中編小説の「著作」「α」か、短編小説の「著作」「β」からしか、「集合体現形」「X」を「発見」できない。図3には、元のアンソロジーと同じ「X」というnomen(文字列)をもつ「集合化著作」と「集合化表現形」が存在しないからである。

一方、図5のようにモデル化すれば、「集合化著作」「X」から「集合化表現形」「X」を経由して、「集合体現形」「X」に至る、標準的なフローが成立することになる。図5の場合、「集合体現形」「X」を「発見」するルートは、合わせて3つ(「著作」「α」経由、「著作」「β」経由、「集合化著作」「X」経由)存在しているのである。

「集合体」のモデル化で重要なのは、収録作品の「著作」と「表現形」の系列と、「集合体」独自の「集合化著作」と「集合化表現形」の系列という、複数(multiple)の系列を並立させることなのである。

第2節 「集合体」と複数部分からなる小説

図5の「表現形」「α」「表現形」「β」と「集合化表現形」「X」の関連は、LRM-R25「集められた」(was aggregated by)である。この関連は「表現形」間のものである。



図6

LRM-R25について、LRMは次のような例を挙げている。

Edgar Allan Poeの“The fall of the House of Usher”の英語テキストは、V.S. Pritchettにより選ばれて集合体現形“The Oxford book of short stories”を作り出した集合化表現形により集められた⁸

LRMはこの「The Oxford book of short stories」について、別の箇所（LRM-E4の例）でも取り上げている。LRMはそこで、この「集合体」の「集合体現形」には、V.S. Pritchettの「知的著作である**集合化表現形**と、選択された様々な著者による41の短編の**表現形**」の双方が「具体化」されていると指摘している。⁹

つまり、「The Oxford book of short stories」の「集合体現形」が具体化している「複数（multiple）の表現形」の総数は、収録作品数=41ではない。正しくは、それらと「集合化表現形」を合わせた、 $41+1=42$ なのである。

LRMの「The Oxford book of short stories」に関する議論を、以下にまとめて図示する。

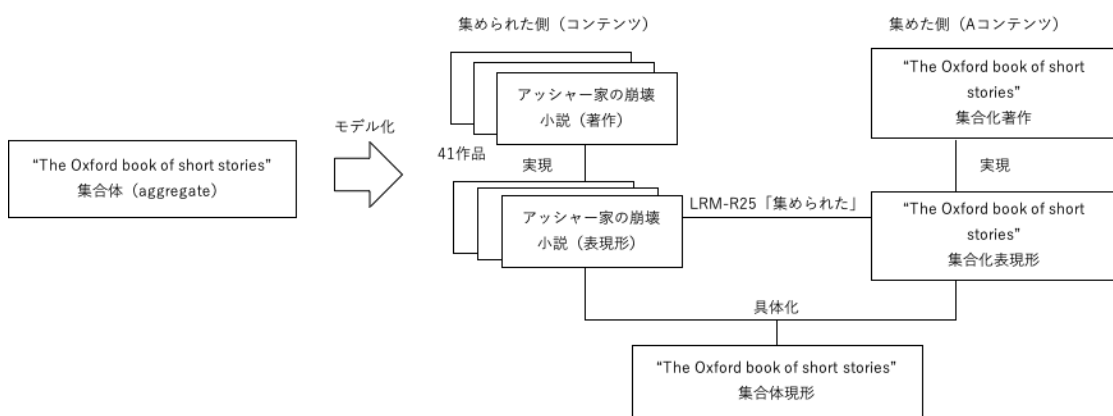


図7

この場合、ユーザーが「The Oxford book of short stories」という「集合体現形」を「発見」するルートは、両系列合わせて42通りも存在しているのである。

LRMは「集合体」を、特定の種類の小説と対比している。引用にあたり、邦訳の「集合体現形」を「集合体」に変えた。また、議論の都合上、原文も合わせて引用する。

集合化著作の核心は選定と編成の基準にある。この核心部分は集められた**著作**自体の中には存在**せず**、全体・部分関連は適用されない。集合体を、多数の章で構成される小説のような、構成要素から成る**著作**と混同すべきではない。¹⁰ (引用4)

The essence of the *aggregating work* is the selection and arrangement criteria. It **does not** contain the aggregated *works* themselves and the whole-part relationship is not applicable. An aggregate should not be confused with *works* which were created with parts, such as multipart novels.¹¹

邦訳では、「multipart novels」が「多数の章で構成される小説」と訳されている。多くの小説がそうしたタイプに該当するが、その場合、「著作」は通常、ひとつである。例えば、

安部公房の「砂の女」は3つの章で構成されているが、その各章が独立した「著作」として扱われることはない。「砂の女」は確かに「構成要素から成る著作」だが、全体でひとつの「著作」なのである。そうした単一「著作」の小説と、複数の「著作」で構成される「集合体」では、比較にならない。

では、LRMが「集合体」と比較している「multipart novels」とは、どのような小説なのだろうか。

ここで注意すべきなのは、引用4の「全体・部分関連」(whole-part relationship)が、通常の意味における全体と部分の関係ではないことである。例えば、「The Oxford book of short stories」が全体で、「アッシャー家の崩壊」はその部分だと指摘することは勿論、可能である。だが、それは引用4にある「全体・部分関連」ではない。

引用4の「全体・部分関連」を理解する為には、LRM-R18「部分をもつ」を参照する必要がある。この関連はLRM-R25とは違い、「著作」間のものである。

「multipart novels」という言葉は、LRM-R18でも使われており、「複数部分から成る小説」¹²と訳されている。それは引用4の「多数の章で構成される小説」と同類のように思えるが、内実はまったく異なる。

LRM-R18は「一方の内容が他方の構成要素となる、2つの著作どうしの関連」と定義されている。さらに、「具体例には、協奏曲の楽章、連詩内の詩、複数部分から成る小説、三部作などがある」として、以下の作品が例示されている。¹³

*A wizard of Earthsea*は、Ursula K. Le Guinによる*Earthsea trilogy*の部分である

Richard Wagner の *Der Ring des Nibelungen* は、Richard Wagner の *Götterdämmerung* という部分をもつ¹⁴

こうした例で分かる通り、「multipart」は「多数の章」ではなく、それぞれ独立した複数の「著作」を意味している。

LRMが「複数部分から成る小説」の例として取り上げた「ゲド戦記」(Earthsea trilogy)でいえば、「影との戦い」「こわれた腕輪」「さいはての島へ」はそれぞれ独立した「著作」であると同時に、「ゲド戦記」という「大きな著作」(全体)を構成する「著作」(部分)でもある。(→補遺2)。

同様に、ワーグナーの「神々の黄昏」は「ニーベルングの指環」という「大きな著作」を構成する「著作」だが、同時に独立した「著作」(楽劇)でもある。

そしてLRMは、そうした「全体・部分関連」は各「著作」にとって、「inherent」(本来備わっている固有の性質)だと指摘している。

日本の例としては、三島由紀夫の「豊穡の海」を挙げることができる。「豊穡の海」は「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」という4作品から成る小説であり、その4作品と「豊穡

の海」の「全体・部分関連」は、それぞれにとって「inherent」である。

「豊穰の海」を構成する「著作」(部分)であることは、「天人五衰」に本来的に備わっている性質であり、逆に「天人五衰」を部分としてもつことは、「豊穰の海」が本来備えている性質なのである。

LRMが「集合体」と対比しているのは「多数の章で構成される小説」ではなく、このような「複数部分から成る小説」なのである。

「集合体」と「複数部分から成る小説」を比較した場合、そこには大きな差異がふたつある。全体と部分の関係性の差異と、「集合化著作」と「大きな著作」の差異である。

まず、全体と部分の関係性の差異について取り上げる。「アッシャー家の崩壊」と「The Oxford book of short stories」の場合、既に指摘した通り、前者は後者の部分ということも可能である。しかし、前者と後者の関係は、LRM-R18の「全体・部分関連」のように「inherent」なものではない。特定のアンソロジーに収録されていることが、「アッシャー家の崩壊」が本来もっている性質であるはずもないからである。

「集合化著作」について、LRMは次のように述べている。ここでも「集合体現形」を「集合体」に変え、原語「set」を補入した。

このタイプの**著作**は、複数の独立した**表現形**の集合 (set) を1つの集合体に変形する、糊、綴じ、接合材としても注目されてきた。¹⁵ (引用5)

この指摘の通り、「The Oxford book of short stories」の「集合化著作」は、本来無関係な41作品を「集めて」繋ぎ合わせる「接合材」(mortar)なのである。なお、「複数の独立した表現形の集合 (set)」という一節の解釈は、LRM 5.7読解の重要な鍵のひとつなので、次節で詳述する。

一方、「ゲド戦記」や「豊饒の海」のような「大きな著作」は構成する「著作」(部分)と一体であり、その関連は「inherent」である。当然、「集合化著作」＝「接合材」は存在しない。構成「著作」を単独で出版したり、あるいは複数組み合わせで出版したりしても、それらと全体の関連は何ら変化しない (LRM-R18のスコープ・ノート参照)。

そして、LRMが「複数部分からなる小説」を持ち出した最大の理由は、「大きな著作」と「集合化著作」の混同を戒めることを通じて、後者の特異性を明確にすることにある。「大きな著作」は通常の「著作」の延長線上にある。だが、「集合化著作」はそれらとは一線を画す、特殊な「著作」なのである。

例えば、「豊穰の海」という「大きな著作」は、「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」という4つのテキスト全体の「知的・芸術的内容」に他ならない。しかし、「The Oxford book of short stories」の「集合化著作」は、そこに集められた諸作品のテキスト全体の「知的・芸術的内容」ではない。引用4にある通り、「集合化著作」の「核心部分は集められた著作自体の中には存在せず、全体・部分関連は適用されない」のである。

別の例として、モーツァルトのピアノ協奏曲20番と24番をカップリングした「集合体」(CD等)を取り上げる。そこに収録されたピアノ協奏曲20番と24番は、それぞれ3つの楽章で構成された「大きな著作」である。その為、それらの「大きな著作」は部分である各楽章(独立した構成「著作」)を合わせた全体となる。

だが、ピアノ協奏曲20番と24番をカップリングした「集合体」の「集合化著作」は、その2曲の「著作」を合わせた全体ではない。ピアノ協奏曲20番と24番を合わせた全体はそもそも楽曲(「著作」)ではないし、モーツァルト自身、そのような奇妙な対象を作曲していない。「集合化著作」(Aコンテンツ)はあくまでも通常コンテンツとは別物なのである。

以下に、「集合体」と「複数部分からなる小説」(大きな著作)の違いについて、表として提示する。

	全体と部分の結合度	部分の独立性	著作の核心
集合体 「恐ろしい話」	低・本来無縁	独立している	各部を繋ぐ接合材
大きな著作 「豊稷の海」	高・inherent	独立できる	部分を合わせた全体

いずれにせよ、「集合化著作」＝「接合材」というのは比喻にすぎない。ここで、議論は冒頭に戻ることになる。「集合体」独自の「Aコンテンツ」をモデル化した「集合化著作」とは、具体的にはどういうものなのだろうか。

第3節 「集合化著作」とは何か

この最大の問題について、LRMは複数箇所、言葉を微妙に変えながら説明している。まず、LRM 5.7には次のような指摘がある(引用4から抜粋して再引用)。

集合化著作の核心は選定と編成の基準にある。

一方、LRM-E2「著作」のスコープ・ノートでは次のように説明されている。引用では邦訳の「集成」を「組立」、「順序」を「配列 (ordering)」に変え、「構想またはプラン」を原語「concept or plan」に戻した。

集合化**著作** (aggregating works) および逐次刊行**著作** (serial works) の場合、**著作**の本質は、結果的に集合**体現形** (aggregate manifestation) として具体化される、他の**著作**の**表現形**の選択、組立 (assembly)、配列 (ordering) に関するconcept or planである。¹⁶ (引用6)

LRM 5.7の「選定」とLRM-E2の「選択」の原語は共に「selection」であり、前者の「編成」(arrangement)は後者の「組立」と「配列」を一語でまとめたものといえる。両者の説明はほぼ同一だが、LRM-E2では「集合化著作」と逐次刊行物の「逐次刊行著作」が並んで取り上げられると共に、「concept or plan」が追加されている。

「集合化著作」と「逐次刊行著作」は共に、「他の著作の表現形」の「選択、組立、配列」に関する「concept or plan」と説明されているわけだが、何故、「他の著作」ではなく「他の著作の表現形」なのだろうか。

この点について、LRMは次のように指摘している。この一節は、引用3の「中略」部である。引用にあたり、邦訳を一部変更している。また、原語の確認が必要なので、原文も合わせて引用する。

この意味で**表現形**だけが組み合わされる（あるいは集められる）ことができるため、作品集め (aggregation) は**表現形**レベルで成立することになる。¹⁷ (引用7)

In this sense the aggregation happens on the *expression* level, because only *expressions* can be combined (or aggregated).¹⁸

原文の「aggregation」は、「集合体」を創造する為に、「集合者」が作品を集めることを意味している。ここではそのまま「作品集め」としたが、その内容については小説よりも音楽を例とした方がわかりやすい。

先に取り上げた、モーツァルトのピアノ協奏曲20番と24番をカップリングした「集合体」(CD等)を考えた時、ふたつのピアノ協奏曲の「著作」を組み合わせるといえるのは、実は意味をなさない。「集合体」に実際にカップリングできるのは、特定のオーケストラと指揮者そして独奏ピアニストによる演奏、つまり個別 (discrete) の「表現形」だけだからである。仮にCDのジャケットにクレジットされていなくても、そこに収められているのは。必ず特定の演奏＝「表現形」なのである。

異なる「表現形」すべてに共有する内容である「著作」それ自体を集めて組み合わせることは、誰にもできない。その為、LRMはそうしたCDのような「集合体」を「著作のコレクションとしての集合体」ではなく、「表現形のコレクションとしての集合体」と呼んだのである。

集められた「表現形」は「set」となり、そこからさらに次のプロセス（「組立」と「配列」）へと進み、最終的に「集合体」が創造されることになる。LRMはそのプロセスを「変形」(transform)と呼んでいる。

前節で強調した通り、「複数の独立した表現形の集合 (set) を1つの集合体に変形する」(引用5) という指摘は、LRM 5.7読解の重要な鍵なのである。

この指摘は、「集合体」(aggregate) が「set」ではないことを前提としている。もし「set」

と「集合体」が同じであれば、そもそも前者を後者に「変形」(transform)する必要はないからである。

LRMにおける「集合体」は「set」にはない何かをもっており、それを追加することで、「set」が「集合体」に「変形」(transform)されるのである。

その何かとは、内部構造である。冒頭で指摘した通り、単語としての「aggregate」は単に「集める」こと、あるいはその結果「集められたもの」を意味する。だが、LRMが「集合体」として使う場合は、何らかの構造をもつものに限定されるのである(逆に、「aggregate」にはなく、「set」にはあるものについては、補遺3で述べる)。

「set」は要素の集まりだが、その集まりは内部構造をもたない。例えば「10以下の奇数」という内包の「set」は、外延的に「1、3、5、7、9」と表記することができるが、それは「5、9、1、7、3」であっても何ら問題ない。

しかし、「aggregate」=「集合体」の場合、集められた要素は「集合者」によって「組立、配列」され、それによって何らかの内部構造をもつことになる。そのプロセスを経て、初めて「複数の独立した表現形の集合(set)」が「1つの集合体に変形」されるのである。逆にいえば、単に作品の「表現形」が集められただけの段階では、それはまだ「集合体」とは呼べないのである。

この点を明らかにする為、具体例として「古今和歌集」を取り上げる。

周知のように、「古今和歌集」は「集合者」(この場合は撰者)である紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑による勅撰和歌集(アンソロジー)である。「古今和歌集」がそこに集められた千首以上の和歌だけでなく、撰者による「知的・芸術的な行為」の成果であることは誰も否定しないだろう。

「古今和歌集」の撰者達は無数にある和歌の中から千首あまりの和歌を「選択」したのだが、彼らは単に和歌をコレクションしただけではない。彼らはそこに、春・夏・秋・冬・恋・物名といった「部立」(内容による分類=「組立」)を導入した(それは後の勅撰和歌集にも受け継がれている)。さらに、各巻の和歌の「配列」にも工夫(例えば時間軸に沿う形で配列される等)が凝らされている。

このように、和歌が選択され、内容別に組み立てられ、規則的に配列されている「こと」が、「古今和歌集」の本質なのである。そうした内部構造を無視し、単なる「set」として和歌をランダムに並べたものは、(和歌がすべて同じであっても)もはや「古今和歌集」ではない。

「表現形を集めるプロセスは、それ自体が知的・芸術的な行為」(引用3)であり、「古今和歌集」で和歌が「選択、組立、配列」されている「こと」は、そうした「知的・芸術的な行為」の成果である。そして、その成果の「知的・芸術的内容」こそが「集合化著作」に他ならない。繰り返しになるが、「古今和歌集」の「集合化著作」は、そこに収録されている和歌の「著作」とは別物なのである(→補遺4)。

そして、和歌の「選択、組立、配列」は「知的・芸術的内容を伝達する個別の記号の組み

合わせ」という「表現形」の定義に合致している。それが「古今和歌集」の「集合化表現形」なのである。

これまで論じてきたモデル化前のプロセスについて、以下に図示する。

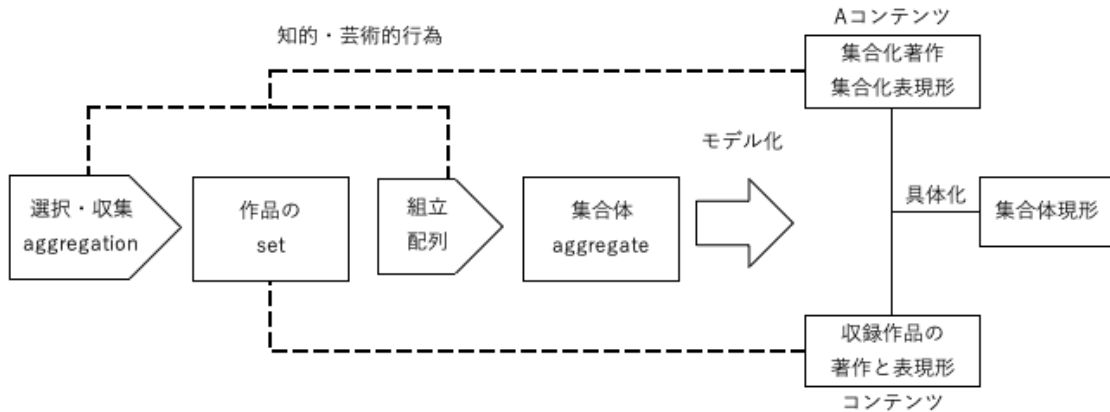


図8

まず、作品の選択と収集（aggregation）が行われる。しかし、単にコレクションされただけの段階では、集められた作品は（内部構造をもたない）「set」でしかない。その「set」は、収録作品をモデル化した「著作」と「表現形」に対応している。

「集合者」は、さらに集められた作品を適宜「組立、配列」することで「set」に内部構造を持ち込み、「集合体」（aggregate）を完成させる。それは（作品の「選択」共々）「集合者」による「知的・芸術的な行為」であり、その「こと」（Aコンテンツ）が「集合化著作」と「集合化表現形」としてモデル化されることになる。

先の図7とこの図8を合わせたものが「集合体のモデル化」の最終形であり、LRM5.7読解のゴール地点である。

補遺1

「集合体現形」という用語はLRM5.7末尾にある以下の一節で、再度使われている。本文で指摘した通り、LRM5.7で「集合体現形」が使用されているのは、図5.7を除けば、引用1とこの一節の二箇所だけである。

集合体現形は集合化著作に対応する表現形を具体化したものであるが、¹⁹

LRM5.7における「集合体現形」は、いわば端役に過ぎないのである。

補遺2

ここでは、「Ursula K. Le GuinによるEarthsea trilogy」を「複数部分から成る小説」の例として扱っている。しかし、邦訳には「三部作」という言葉があり、それは通常、「trilogy」

の訳語として使われる。それからすると、邦訳は「**Earthsea trilogy**」（「ゲド戦記」）を「三部作」の例として扱っているのかもしれない。

しかし、邦訳が「三部作」と訳している原語は「**trilogy**」ではなく、「**trptychs**」である。「**trptychs**」は絵画の「三連祭壇画」=3つの部分（構成著作）から成るひとつの祭壇画（大きな著作）を指す美術用語であり、「**Earthsea trilogy**」（「ゲド戦記」）は明らかにそれには該当しない。

LRM-R18は「音楽」、「詩」、「小説」（複数部分からなる小説）、「絵画」（三連祭壇画）という4つのジャンルからふたつ選び、「音楽」の具体例として「ニーベルングの指環」、「小説」の具体例として「ゲド戦記」を取り上げているのである。

補遺3

「set」にあつて「**aggregate**」にないもの、それは厳密な内包（選択条件）である。

「**aggregate**」の場合、「集める」条件は基本的に自由である。有り体にいえば、何でも構わない。何らかの条件（例えばイケメン）を設定して「**aggregate**」することは勿論可能だし、とりあえず目についたものを適当に「**aggregate**」しても問題ない。LRMも「集合体」には「場合によっては、無作為な表現形のコレクションであるかのように見えるものもある」ことを認めている。²⁰なお、たとえ「無作為」であっても、「集合体」には何らかの構造が備わっていることを指摘しておく。

一方、「set」の場合、そこに含まれるか否かについての厳密な境界線を引く条件（内包）が必要となる。イケメンにはそうした明確な境界線はない為、「イケメンの集合体」はあり得るが、「イケメンのset」は存在しない。イケメンとしてピックアップされた3人組がそれぞれ「本当に」イケメンであるかどうかについても、意見が分かれる可能性がある。だが、特定の整数が「奇数のset」に含まれるかどうかについて、意見が分かれることはない。

ただし、先の3人組（仮にA、B、Cとする）についても、「set」とみなす方法がある。それは、「Aであるか、Bであるか、Cである」という選言的性質を内包とすることである。ただ、それでも例の3人組は残念ながら「イケメンのset」ではない。それは単に「Aであるか、Bであるか、Cであるset」にすぎない。

「集合体」を作成する為に、単に収録作品を集めただけの段階でも、それらをすべて繋いだ選言的性質を内包とする「set」とみなすことができる。それがLRMのいう「複数の独立した表現形の集合（set）」である。

一方「集合体」の場合、通常、選言的性質以外の内包（選択条件）をもつことは難しい。本文で取り上げた「**The Oxford book of short stories**」や「古今和歌集」にも当然、選択条件はあつただろう。しかし、その条件が何であれ、対象がそれに該当するか否かを定める厳密な区分としては機能しない。

分かりやすい例として、「恐ろしい話」（ちくま文学の森シリーズ）というアンソロジーを取り上げる。このアンソロジーについては、題名「恐ろしい話」自体が内包（選択条件）な

のではないかという考えが頭に浮かぶ。

しかし、その考えは誤りである。それはイケメンと同じであり、「恐ろしい話」とそうではない話の間に、明確な境界線など存在するはずもない。さらにいえば、アンソロジー「恐ろしい話」には、そもそもひとつも「恐ろしい話」が入っていないという批判も十分、成立するのである。

勿論、既に指摘した通り、アンソロジー「恐ろしい話」についても、選言的性質を内包とする「set」とみなすことは可能である。だが、それは「恐ろしい話のset」ではない。「恐ろしい話のset」は「イケメンのset」と同様に存在しないのである。

さらに、本ノート第1章補遺5で簡単に触れた「集合体現形」(aggregate manifestation)と「set」の関係についてもここで論じておく。

LRMは「体現形」(manifestation)を「set」と定義している。「集合体現形」はその名の通り「体現形」なので、定義によって「set」である。つまり「集合体現形」は「aggregate」であると同時に「set」でもあることになる。

これは一見、矛盾しているように思えるが、無論そうではない。「set」としての「集合体現形」の要素は「実体」「個別資料」のインスタンスである。その内包(選択条件)は、LRM-E4「体現形」の定義にある「知的・芸術的内容と物理的形式の様相において、同一の特性を共有する」キャリアである。

一方、「集合体現形」が「aggregate」しているのは「個別資料」ではなく、複数の系列の「著作」と「表現形」である(図8を参照)。「集合体現形」は、複数の系列の「著作」と「表現形」を「aggregate」して「具体化」したものであり、同時に「個別資料」の「set」でもある、ということである。

補遺4

ただ、こうした「集合化著作」の説明は、他の「著作」の説明に比べて、やや自明性に欠ける。

例えば、モーツァルトのピアノ協奏曲20番の「著作」については、異なる表現形(楽譜や演奏等)すべてに共通する「知的・芸術的内容」と説明されるが、それに異を唱える者は少ないだろう。

だが、「古今和歌集」の「集合化著作」とは、和歌が「選択、組立、配列」されている「こと」の「知的・芸術的内容」だという説明に対しては、より明解な説明(それは具体的にはどういうものなのか)を求める者が出てくる可能性がある。

LRM-E2が提示した「concept or plan」(引用6)は、そうした弱点を補う為の補強材といえる。また、LRMは「逐次刊行著作」を説明する際、「出版者と編者の意図(intention)」という、新たな要素を持ち出している。²¹こうした補強材を導入することによって、確かにより明解な説明が可能になる(ようにみえる)。

LRM-E2を「古今和歌集」に適用すると、「古今和歌集」の撰者達は、自らの「構想やプ

ラン」に基づいて和歌を意図的に「選択、組立、配列」することでアンソロジーを創造したのであり、そうした「構想やプラン」、「意図」こそ「集合化著作」の核心なのだ、といった説明になる。

だが、「著作」の説明に「構想やプラン」「意図」のような、「行為主体」の「心の中」にある要素を持ち出すのはリスクである。例えば、モーツァルトのピアノ協奏曲20番の「著作」は、モーツァルトの「構想やプラン」あるいは「意図」であるという説明は、先の通常の説明よりも明解になるどころか、むしろ劣後している。

「集合化著作」と「逐次刊行著作」は、いわば「著作」の中の異端児であり、それらに関するLRMの説明に潜む問題は意外に根が深い。この問題については、LRM5.8「逐次刊行物のモデル化」について論じる際に、再び取り上げる予定である。

「IFLA LRM試論 (6) –LRM5.7「集合体のモデル化」了

¹ Pat Riva, Patrick Le Bœuf, and Maja Žumer, Consolidation Editorial Group of the IFLA FRBR Review Group (和中幹雄/古川肇, 他訳)『IFLA 図書館参照モデル-書誌情報の概念モデル-』樹村房、2019.12、p. 94

² 同上、p. 94

³ 同上、p. 95

⁴ 同上、p. 95

⁵ 同上、p. 94

⁶ 同上、p. 28

⁷ 同上、p. 99

⁸ 同上、p. 73

⁹ 同上、p. 24

¹⁰ 同上、p. 95

¹¹ Pat Riva, Patrick Le Bœuf, and Maja Žumer, Consolidation Editorial Group of the IFLA FRBR Review Group 「IFLA Library Reference Model」 Issued July 2024
<https://repository.ifla.org/server/api/core/bitstreams/7d23aa55-1f85-490f-b500-6170285585a6/content> p. 94 [最終閲覧日:2025-03-29]

¹² 前掲 1、p. 69

¹³ 同上、p. 69

¹⁴ 同上、p. 69

¹⁵ 同上、p. 95

¹⁶ 同上、p. 18

¹⁷ 同上、p. 95

¹⁸ 前掲 11、p. 94

¹⁹ 前掲 1、p. 95

²⁰ 同上、p. 94

²¹ 同上、p. 97

(ちば こういち)
2025年4月9日受理